

あの青春時代の十年は私の人生の中で何であったのでしょうか。戦争という悲惨な歴史がなかったら無上の幸せな人生が送れたものにと、深く考えさせられます。

戦後六十年、敗戦後の平和を、覆すような戦争を絶対にやってはならないと念ずる次第です。

シベリアの思い出

宮城県 小 関 太郎作

私は昭和十八（一九四三）年召集になり、仙台に入り、小樽に行きました。船で時化に会い、船員さえも初めてと云うほど船が揺れました。飯盒を持って甲板で滑ると空高く舞い上がってしまう。そういう暴風雨でした。さらに北へ向かい、エトロフに上陸しました。私は野砲隊で守備隊として、ここに陣地を敷いた訳です。ちよどロスケが参戦して満州からこちらへ来るそうだから穴でも掘って入ろうと云うことでしたが、その内に八月十五日の玉音放送でした。その時は皆で万歳をしたのです。「良かったなあ」と大の字になって休んだ思い出があります。そしてソ連軍の武装解除を待った訳です。

来た兵隊は背の小さい兵隊でしたが、三日ぐらいはゴロゴロしていました。乾パン二袋を持たさ

れて船に乗せられ、その船は毎日北を指して走っている。操舵室へ行ってもどこへ行くのか分からない。前に行く駆逐艦についてこいと云うのだからです。三日ぐらい経つて上陸したところは北極太の対岸のソ連の港でした。

下船して、今から家へ帰る前に仕事をするから汽車に乗れと云う。貨車で馬の敷くような藁だけで、便所はない。一角に穴があり、大小便は樋を通して外に出す。外側はバラ線で三重、四重に張ってある。夜になると貨車は前と後からライトを当てている。五日ほど経つて収容所へ行つて、自分の氏名、兵役を書かされ、私は農民といつて申告しました。食う物には大変苦労しました。

ある日、作業の帰りにイワシの頭が二つあった。これはいいダシになると飯盒で煮て食べた。臭いもいいしうまかった。面白いことに岩に生えているコケを飯盒の蓋で煎つて食べた。そういう日もあったのです。アミーバ赤痢になつて垂れ流しの大便が多くなり、南京袋のおしめをしたが、これ

はつらいものであつた。

毎日同じことで、話は食べ物の話ばかりである。川蟹を叩き潰して揚げて食べる。粉が配給になり煎り米にして食べる。そしてこんなことでは絶対死なないぞと云う信念を堅持したことが良かったと思つている。

また電柱工事は三十センチ掘つて建てる。しかし力仕事はやったことがないし、地中は凍っている。それでつるはしの先は丸くなっている。叩いても掘れない。最初は焚き火をして土を溶かして掘つたのですが、私は悪知恵を出して、ロスケが検査をする時の状況を見ると、建てた電柱の上だけを見ている。それで立てる電柱の下を切つて、雪を集めて置くと一晩で凍つて電柱はピント経つ。今になってあの電柱はどうなっているかなと思つています。零下二五度の寒さはダイナマイトの包み紙で寒さを凌ぎました。

以下にシベリアの思い出を記録してものがありますので、それをご披露します。

—シベリアの松尾さん—

私の戦後は、シベリアから持ち帰った防寒外套（がით）を、亡き母に着せてあげること……といわずに思いつづけていました。

しかし、思えば、これは当時の私が、私だけをみつめていた、一人よがりの感情に過ぎなかったようです。私の戦後は、もつとほかにもたくさんしてあげなければならぬことがございました。

昭和二十一年の秋のことです。この時は、私たち邦人二十人とソ連兵二十人が合同で作業をしていました。現場は移動するので、簡単な囲いの中の小さなバラック建ての宿舎に収容されました。同じ棟でソ連兵とは一枚の板で仕切られていました。相変わらずの最悪の食糧で腹が減って腹が減って、目につく食べ物は片っ端から失敬するといふ有様でした。その日も、作業からの帰り道、畑の中に積んであるジャガ芋、カボチャ、トウモロコシに目をつけたことは当然です。

夕食の後、失敬勇士（食糧盗み）三人が、そつ

と抜け出して出掛けました。南京袋三枚持って行ったはずです。シベリアの夜は遅く、ようやく暗くなったとみると、もう夜の八時半です。もはや、ソ連兵の点呼です。九時十分前になりました。しかし、失敬勇士三人の一人の責任者として心配でなりません。窓際に立って外を眺めますが人の影はみえません。八時五十五分、当時、炊事一切を担当してくれた松尾さんも心配してきます。とにかく、この急場をどうするか……。相談の結果、まず炊事の点呼をし終わったらその人たちは素早く点呼執行兵の先回りをして、私たちの中にもぐり込み、毛布を頭からすっぽりかぶって風邪で就寝中として数だけを合わせるといふことにしました。ピストル携行のソ連兵です。本当に命がけの大ばくちでございました。運よく切り抜けられ万歳を低い声で叫んだものでした。

これは或る日の出来事ですがこのように、ご自分の命を張って私達の食糧の調達に毎日、毎日うち込まれたこの人、松尾一三さんに、私は終生の

尊い思い出として、かつまた、これからの私の生涯を通じて人の道としての礼をつくしたい。と終戦後半世紀以上も過ぎた今日でも、特に強く私の心が訴えております。

—夢—

一、シベリアの病院

「ダワイ、ダワイ（ハヤク、ハヤク）」と叫ぶ声が廊下に響きます。先頭をその声の主、ソ連兵が歩いてきます。その後ろに担架を乗せた台車が来ます。頭の方を先に、足もとの方に両手を掛けて日本人が一人押しています。担架には人が伏せていて薄い緑色の毛布が一枚掛けてありますが短いためでしよう足首が出ています。その足の指には白い荷札のような紙がヒラヒラ揺れています。その白い紙に「一〇三」という数字が読みとれました。

百三号で今朝は三人目だなアー。

毎日、毎日、こんなに死んで……。

早く、帰りたいなアー……。

私の隣の患者氏は、ぽつりとかほそい声でこう呟きました。

二、收容所の私

千島列島のエトロフ島で終戦を迎えた私の部隊は、九月初めにソ連兵に連行されシベリヤに抑留されました。ここの捕虜收容所は、一万五千平方メートルほどの敷地で、中央は広場とし、その周囲に長方形の木造バラック百平方メートルほどの收容棟十棟が建ち並んでいます。收容所の出入口は一カ所だけで、ソ連兵の管理棟が入り口近くに三棟ほどあります。

敷地の内と外の境界には、丸太杭が一メートル間隔で打ち込まれ、その高さは十メートルぐらいで縦横にバラ線がビッシリと張られ、外部との区切りを明確にしております。また、その内側三、四メートルのところには、同じような作りの棚で高さ三メートルくらいのものですが、外柵に沿って張りめぐらされております。いわば獐猛な獣を二重に囲むような施設でしたので、入所したとき

はみな苦笑したものです。この外棚の四隅には、丸太で組み上げた高さ十五メートルくらいの櫓が有って、この上から四六時中、ソ連兵が自動小銃を小脇に抱えて私達を監視しております。

櫓は日本の盆踊りに建てている櫓太鼓の櫓そっくりで、これにまた苦笑しました。収容棟の内部は間仕切りのない大部屋で、入り口に立てば一目で全員の状態が見渡せるようになっております。廊下は入り口から奥へ真つすぐ通じておりこの廊下の左右に部屋が二段に板張りで作られております。

—シベリアの汽車—

まったく人の住める所ではないとされていたこと、シベリアでは毎日労働を強制されました。今日も寒いなァー。もっと高く積んで燃やすべやァー。なあんだ、今日は七月二十五日だど、お盆もはや、というのになァー。

真夏というのにこんな日が幾日もありました。また毎日の食べ物に質においても、量等でも全く

人間であることを無視した劣悪さです。俺達を馬と思っているか!! 食事を前にして罵る声が毎日飛び交います。詮方無き捕虜の身、という我が身を忘れつい口をついて出てきます。

妻と子供三人を残して出征したという宮城県出身の四十一歳氏は、夕暮れの庭の片隅に立って黙って涙していた姿がもの哀れをさらに誘ったものでした。病人も毎日出ていました。自分もいつかは病気に罹るのではという不安は誰にもありません。ただ、その不安というのは病気そのものよりも、病人故にこの集団から離れてしまうことでした。どんなに辛くともいい、みんなと一緒に暮らしたい、という最も強い心情がこうさせていました。

冬は零下三〇度以下となれば作業は中止でしたが、それ以外は日曜日を除き毎日就労です。朝七時には五千六百人が一斉に広場で点呼を受け七時半には出発です。しかしこの人員が一度に食事が出来る設備がありませんので、三回ぐらいに分け

ての炊事となります。そのために早い組は四時から朝食となりました。

現場は二、三キロぐらいの山麓まで歩いて行きます。途中で鉄道が近く、時々走る列車が見えます。機関車の全面には大きなスターリンの写真が飾ってあります。機関車は沿線に積んである薪を燃料として動いていました。その列車が通りますと全員は一斉に路上に止まります。行く列車を眺めます。早く帰りたいなア！ きまって口をつく私達の言葉でした。

列車がはるかあなたに消えるまで、じーっと立ちつくします。監視のソ連兵は「ビストラ、ビストラ」と叫びながら銃を振り上げます。これはいつものことです。私達は笑いながら列車の方から徐々に目を戻して歩き出します。歩みはほんとうにゆつくり、いやのろのろといった方が適切でしょう、このようにしか歩けないのです。体がいうことを利かないのです。

なアーんだーこりや、うち（町）でする葬儀の

野辺送りそつくりだなア。と、新潟県出身の戦友氏。

—イワシの頭—

私は、今日もなんとかノルマを果して帰路につきました。曇天のような日には、間断なく粉雪が降ります。路の雪が歩くたびに「キュツ、キュツ」と鳴きます。もう間もなく収容所という所まで来ましたら、道端にイワシの頭が二つ捨ててありました。これはこの収容所の食糧事情からすれば大そうな価値あるものです。大収穫となりました。

早速持ち帰り飯盒で煮込みました。夏分は作業現場によつては食べられそうな野草が見付かります。これは片っぱしから煮て食べていましたから、そのために岩塩を失敬して各自が持っていましたので、このイワシの頭も岩塩で味付けをした訳です。湯気もあがります。音もいい、白い湯気もよかったです、また臭いも本当にいいものでした。抑留以来五カ月でしたが、このスープは最高の味でした。これは昭和二十一年二月六日のことでした。

夕食が終わると、我が家の料理、郷土料理の自慢が話題になっていました。そうです。そういうえば夕食後のお話はきまつて、この食べものことでした。しかも、毎日毎日、同じ食べ物の話が繰り返されていたのです。本当に飢えていたのです。

思いもかけなかったイワシのスープにありついて、とてもいい気分でしたのも束の間、どうも胃の下の方にかけて痛み出して来ました。便意も催して来ました。便所は別棟で、これもバラック建て、収容棟から三十メートルほど離れています。出入口から奥の方に通路が一本あり、この通路の左右に一段高く板張りの床があつて、通路に向けて、だ円形の穴をくりぬき隣とも向い側にも仕切りは一切ありません。満席ですと三十人くらいは用便出来ませぬ。

寒い冬ですから、まきストーブが置いてあつて、昼も夜も当番が付けられ暖をとつております。出入口は二重の板戸になつてましたが、何人もが終始用便するので暖をとる、とは名ばかりでした。

私はこの便所にしゃがみました。三十人くらいの人達がなんの仕切りもない便所での用足しをし、いろいろなお話をする、なかなか楽しい光景のものでした。

「カニタタキ」という小さい川蟹を丸ごとつぶして、布袋で絞り、その絞り汁で小麦粉をこねてすいとんを作る。これがまた、飛びつ切りのおいしき、とは福島県出身氏の便所での話。

—薬石の効—

シベリヤの下痢はなかなか忙しく、三十人用の便所では、用便が済み、立ち支度を整えようと、また便意を催す。一方、腹の痛みは依然として続きます。冬の夜の便所通いですから身体も冷えますます頻度が高まります。

一回の便所では立つてはしゃがみ、しゃがんで立つつという連続動作が三、四度になりました。ですから、その姿は何ともかたわらで見ている人の方が、気の毒というほどだったと思います。とにかく通いました。もう十四回、五回になります。

外気は零下二五度以下となりました。腹を温めればいくらか楽になるのでは？ と、布切れ、紙類も巻いてみました。しかし、一向に和らぎません。

ここシベリヤには湯タンポはもちろん、懐炉とてございません。ほんとうに困りました。

それでも何かいい方法は？ と思索し続けます。一晚中はどうせ眠らないと観念しましたし、ストーブ番氏だけにさせるのも申し訳ない気持ちもありましたから、薪運びを手伝おうと動いていましたら、小さい石ころにつまずきました。そのとき、これだ！ これをやってみようと、一策を考えつきました。

その躓いた石ころを、早速ストーブの中に入れて焼いたのです。ころ合いははかってストーブの中をのぞきます。ところが、その入れた石ころが見当たらないのです。よくよくみると、熱でザクザクに崩れているのです。よし、別の石をと、底から硬そうなものを見つけ、また焼きました。祈るような気持ちで待ちました。今度は成功したよう

です。これを布に包んで腹部に当ててストーブの側に横になります。ポカポカと中から温まるという気分はいいものです。

「こんばんわ、さあさあ上がってあたらえ」「今夜はずいぶん冷えるねエ」「おいしいお茶菓子は無いげんとも」「いやいや、こんな寒い夜の火は、なによりのごちそうですが」……などと郷里での冬の夜の来客と交わされた会話を思い出していました。

これはシベリヤの冬の懐石料理というところでしょう。しかし、この願いをこめての策も利あらず、

「薬石の効無く」とはこのことでしょう。ただ「永眠」という文字がつかなかったことが不幸中の救いとなりました。しかし、それでもなお他に良い方法はないものかと、さらに考え思うのでした。

―腰掛け便器―

「さらにいい方法」とは、一つは病気そのものを治すこと。二つには、病気は治らなくとも仕方

がないが、せめて用便は外に出ないで、しかも、なるべく動かないで、ということでした。しかし、この夜更けです、医師はおりません。そんな状況でしたから、一つめのことは今夜に間に合わないことになりました。二つめのことについては、可能性、あるいは望みはあるのでは、ということ、その工夫となりました。しかし、このころになりましたら、用便の紙も無くなってきています。窮余の策として、これは戦友氏からの提案で、冬季の上衣の中に入れてある綿を縫い目から引っ張り出して使うということになっていました。

いわば、紙切れ一枚、余分なものも無い四苦八苦の最悪の事態を、たいしたぜいたくで切り抜けた、というシベリヤの抑留者ならではのことでありました。しかし、この綿抜きを思うままにしていたら、綿入れ上衣でさえも耐えられない冬の中に、裕となってしまいます。やっぱり抑留者でもぜいたくは続きません。

紙も欲しい、工夫も必要と、病人にとつてはな

かなかの難題でした。しかし、人間、土壇場に立たされると、なにかが浮かぶようです。なにかがあるようです。隣の棟の片隅に円筒型の空き缶が転がっているのを見付けました。急ぎその場に行きます。その缶に腰を下ろしてみる。なんと高さはずうと。直径もけっこう。早速、口を上にして両端に細い板切れを渡します。即製の腰掛け便器が出来上がったわけです。嬉しかったです。

収容棟の入り口脇に別室の物置があります。戦友達は、みんな、「ここでやれよ」とすすめてくれました。今の私にとつては、願ってもないこと。涙がでるほど有り難いことでした。私はこの戦友達に感謝を捧げながら尻をまくって腰掛け便器に腰を下ろして、夜もすがら、たれ流しと相成った次第であります。

お陰さまで二つ目の工夫がなりましたし、たれ流しですから、紙もあまり必要ありません。一挙に両方の事が解決出来た訳であります。

しかし、こういうときの時間の流れは、とても

遅く感じられるものであります。同じ流れでも：
…。また、せっかくの戦友達の善意で、私だけの
専用便所に早変わりしたこの場所から、その善良な
戦友達の唯一の憩いであり寝室である部屋に、騒
音とまではいえませんが、出てくる音と、決して
いいとは申されない臭いが行かないで済みました。
これは、本当に、本当に、助かりました。

—望郷—

「早く朝が来ないかア」朝がくれば医師の手当
が受けられる。夜の明けるのが、なんとも待ち遠
しいものでした。こうして捕らわれて凍えそうな
いや、うっかり油断するものなら、すぐ凍傷にか
かる危険に常にさらされている北国の夜、一人、
こんな、たれ流しのこの自分が情けなくて！。
しかし、どんなことがあっても帰りたい。郷里
に帰りたい。死にたくない、生きて、生きて帰ら
たい…。長兄は、外地に出征中、病気になる内
地送還となり、仙台の陸軍病院に入院中であつた
が、回復したろうか…。私のすぐ下の弟も召集さ

れ、仙台の陸軍部隊に入隊したが、外地にでも配
属されたら…。彼は生来、頑健でなかった体質で
どうしているだろう…。その下の弟は、海軍で艦
船に乗り組んで、太平洋に出航したはずだが生き
ているだろうか…。また、その下の弟は、航空隊
へ入隊し、霞ヶ浦にいたが、無事だろうか…。一
番危険な飛行機乗りになってしまつて…。

タンパラで有名だった、あの祖父に仕えながら
男ばかりの六人の私たちを育て、家を守っていた
母、随分無理を強いられた日々であつたに違いな
い。その母は元気だろうか…。

私たちには割りあい口数の少なかつた父であ
つたが、やはり人の親、言いだせないゆえにこそ、
人一倍案じているだろう、その父は丈夫だろうか
…。末弟は、幸い義務教育中だから、一緒に暮ら
してはいるだろうが、その学校は無事か…。と、
さらに、友人から家の周囲等々と、思いが次から
次へと広がります。正に望郷の念禁じがたく、長
い長い悶々の夜でした。

屋外の作業には、いつも着ている防寒外套、夜は掛け布団としても使っていたこの外套は、裏側には、ウサギの毛皮が縫い付けてあります。この外套、内地ではいかに寒くとも支給されない、いわば厳寒の北方圏に派遣された兵士だけに支給されていたようです。これを内地で着たらどんなにか温かいだろう…。

そうだ、もし帰国がかない、頂けるものなら、これを大事にして母上へお土産に持ってゆこう。

そうだ、ぜひそうしたい。さぞかし喜んでくれることだろう。いや、おやじも大いに使ってくれるに違いない。うれしそうにこの外套を手にしている母親の笑顔が浮かんで見えます。待っていて下さい、お母さん。

— 夢 (その一) —

たれ流しの翌七日には入院、毎日の治療で順調に快方に向いました。「尻をまくって、なにくそ、死んでなるものか！」と啖呵を切って、とは似て非なる姿ではありましたが、とにかく強い意志に

支えられた力は大きかった、と今でも信じております。

十日夜はぐっすり眠れ、爽やかな気分で目覚めた矢先に、あの今も忘れがたい「シベリヤの病院」のかぼそい声で呟いた隣の患者氏のことでありました。それから完治退院となり、また収容所へ戻されました。しかし以前とは違った人たちでした。退院してから一カ月も過ぎましたが、まだ極寒の日々で、今日も崖の岩石を崩す作業を続けていました。

「俺、夕べ、お袋が可愛い女の子を産んだ夢を見だどや」「なに、お産の夢だつて。いい夢ではないなア」「なにしてだベエ」「うん昔からそう言っていた」「俺たちはそんな夢を見たら現場働きは中止だった」「そんなごとはねエベ。迷信というものだベエ」と私はせっかくの戦友氏の忠告を一笑に付しました。そして命綱を胴に巻いて崖の中間腹にさがり、足がようやく乗せられるような小さい岩の上に立ち、鑿でダイナマイトを仕掛ける穴

掘りに取り掛かりました。

それから何分ぐらいたったでしょう。「ドーン」と身体に衝撃をうけてハッと気づいたら、私は宙釣り、「危ないッ！」「やめろ、やめろッ！」「はやく逃げろッ！」と下から盛んに戦友たちの叫ぶ声。私は、とにかく命綱をたよりに繋いである落葉松の大木の根元へはい登りました。

この崖は、下の鉄道線路からは三十メートルも切り立っていました。「ウン、だから言ったでネエが」

「今日はやめろ」「焚火番でもしているよ」「いやいや、てつきり駄目だと思つたなア」と、口々に言いますから、ほんとに危なかつたことと思いません。こんどは親切を素直に頂くことにしました。

「バリ、バリ」と音をたて、火の粉を高く舞上げ大きな焚火を見付めながら、不思議なものだなア、と改めてこの夢によって考えさせられます。

母は病気にでも罹ってはいないだろうか、元気だろうか、ほんとうに大丈夫だろうか！。こんど

は、夢のことから靈感の話しに発展して来ます。

人は末期にはよく肉親に知らせに歩くものだとされているが、今の私にはそんな気配が感じられないからまずは大丈夫では、と心配すれば、「いや、さすがの靈魂でも、こんな凍てつくようなこの極北の地までは来れない」とは、親切な戦友氏の御託宣でした。

— 夢（その二） —

男ばかりの兄弟で育つた私は、幼いころは、よく「姉がほしい、妹がほしい」と言っていたことがあります。神はそれをみてとつてか、せめて夢でも、とかわいい女の子を与えてくれました。

しかし、夢でもいい、あの毎日の苦しい生活の中で、それはまことに嬉しくもまた、和やかなひとときでございました。ただ夢が悪いとされた、その日の崖崩れです。このときから、私の心の中での不吉な思いが、どうしても払いのけることができませんでした。来る日も、来る日も母のことばかりです。

それから二十一カ月。耐えに耐え抜き、待ちに待った帰還の日が訪れました。十二月の、その日の日本海は穏やかでした。上陸地が見えてきます。早くこの目で、と、全員が甲板へ「ドーッ」と押し寄せます。船が傾いて危ないから駄目だ、という注意もなんのその、舞鶴は美しい港でした。ほんとに奇麗な祖国でありました。懐かしい土でした。感激でした。そして、互いに体を擦り合い現実を確かめたものでした。

体には無数の虱が寄生していましたから、検疫という事で根こそぎ駆除してもらいました。また、何年ぶりかの湯舟でのお風呂の味は、これまた最高です。ここからは列車です。

途中、京都に一泊、翌日は上野です。母親への唯一の土産としていた「防寒外套」を大事に持って、改札口へ向かいます。

改札口には、すでに一人並んでいる後ろ姿がありました。私は急いでその人の後ろに立ちました。その前の人があひよいと私の方を振り向くと、アッ

と私もその人も叫びました。そのはずです。彼は私の下の下の弟だったからです。彼も復員で、これから家に帰る途中だったのです。まったくの奇遇であります。驚きでありました。

私は即座に、「おふくろは死んだろう」と思い切つて問いかけてみました。「兄貴どうしてそれを知つたの」と言葉が返ります。やつぱり……と。私は上野駅で母の死を確かめたことになりました。母に会える、早く母に会いたい……と、張り詰めていた心が、ここで急に緩み、立っている足がガクガクと音がするように震えて来ます。

持っていた「防寒外套」にそつと目をやります。せつかく、ここまで来たのに……。疲れがいちどきに全身に覚えてその場に座り込みたいほどでした。そして、やつぱりあの日の夢は……と、思うや切々たる心中でした。

私は、今でも、その防寒外套を大切に保存しております。いつかの日に、亡き母のご遺骨の上に、そつと掛けてあげたい。掛けてあげて、私の戦後

がようやく終わるような気がいたします。

満蒙開拓の夢とシベリア抑留

香川県 新開 正

私は大正十二（一九二三）年一月十七日、香川県大川郡鶴羽村岡之端の漁師、新開安蔵・トキの長男として生まれ、次男要、三男盛の五大家族でした。家業は漁業ですが農業も自家消費程度の耕作もしていました。父母とも健康で働き者でした。私も父母の手助けをして頑張りました。

私が小学校五年生のころ、大陸が騒がしくなり、私の村からも多くの人たちが出征して征かれました。私の部落からも応召者が出て、その人達の武運長久を祈るため村の神社へ小学生と高等科生と二手に分かれて日参したものでした。

鶴羽尋常高等小学校を昭和十二（一九三七）年春に卒業した年の七月、支那事変が勃発して我が丸亀連隊にも動員令が下り、足立部隊として大陸での敵前上陸に参加して、村からも多くの兵隊さ